

# 魔王代理の演劇物語

雪亜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

新幹線に乗っていたらいきなり異世界に飛ばされたこの物語の主人公「日加那 享（ひかなきよう）」は一流演劇役者を目指す二流役者だったが金欲しさの為魔王の代理を勤める事になってしまいました。

これは三流魔王と共に一流演劇役者を目指す青年の物語である。

# 目次

|                  |     |
|------------------|-----|
| 魔王になった役者         | 1   |
| 魔王の覚悟と代理の決意      | 14  |
| リザードウーマンの一週間(前編) | 36  |
| リザードウーマンの一週間(後編) | 57  |
| リザードウーマンの一週間(裏)  | 86  |
| 毒沼の魔王            | 106 |
| ルレンティア           |     |



# 魔王になつた役者

母さん、お元気でしょうか？

俺は今、東京行きの新幹線でこの手紙を書いてます、いや、書いていたと言うべきでしょうか…今は…謎の粘液生命体に囲まれています。

「えーと…意思疎通は…。」

「ピキヤーー！」

「出来なさそう、逃げるにしても囲まれているし…でもゲームならここで勇者とかが助けに来てくれるはず。」

とは言つてもここは無人の荒野、誰もいないのである。

「いや、夢と言う伏線もある！このスライムだつて…。」

噛みつかれた、痛い。

「だめか…死んだな！」

その時後ろに誰かが現れた。

「まさか本当に勇者が!？」

「えーつと…あのー…ごめんなさい、勇者じゃ無いんです…でもでも！助けに来ました

「…。」

「…え？」

「わ、私は…魔王の…うう…恥ずかしい…。」

「いやいや！頑張つて！と言うか助け…あれ？」

いつの間にか取り囲んで居たスライム達は逃げ出し俺と目の前の少女と二人きりだった。

「わ、私は魔王の…クリュー・ブルフェイアル！私の領地で…あれ？居ない…。」

「さつき逃げ出していたよ、とにかく助かった。」

「い、いえいえ…どういたしまして…。」

不思議な雰囲気な少女が

「そう言えばさつき魔王だとか言つてたような…。」

「は、はい…593代目魔王のクリュー・ブルフェイアルです…とは言つても他の魔王達も居るので大してめずらしく無いんですよ。」

「魔王が跋扈する世界か…嫌な世界だな、俺は…。」

「日加那 亨さん…ですよね？」

「は？何で俺の名前を？」

「細かいことは私のお城でお話ししますので付いてきて貰えますか…？」

「うえー…きなくせえー…つっても何にも分らないし付いて行くか。」

「回りには町なんて何一つ無いから行くところなんて…。」

「ありがとうございます！では失礼して…転送魔法で飛びますので気を付けてください  
ね。」

「魔法も有るのか…。」

「じゃあ…行きますよ…えいつ!」

「カツと光が走った、と言うかこの光の強さは閃光手榴弾に匹敵するレベルである。」

「着きました…どうしたんですか!」

「目があ…目があああ!」

「あつ…私の魔力が強いわつかりに!ごめんなさい、ごめんなさい!」

「割りマジで死にそう、どこぞの大佐もこんな気持ちだったんだろうな…。」

「どうしましたか?…お嬢様、もしかして生身の人に転送魔法を?」

「ご、ごめんなさい…。」

「全く…キュア。」

「少し冷たい声と共に目の痛みが引いていく。」

「大丈夫ですか?」

「え、ええ…ありがとうございます…。」

「魔王様を後できつく叱っておきますのでお許しください。」

「ひっ…。」

メイドさんからギロリと睨まれ更に縮みこむと同時に更に泣き出す始末である。

「いえ、こちらこそ助けて貰ったのでなんとも…。」

「取り敢えずお詫びとして夕食をご馳走致します、それまでごゆるりと…。」

「じゃあ私も…。」

「お嬢様は課題値+50です、説教室行きにならないだけでも感謝してください。」

「ま、また増えた…。」

「課題値って?」

「魔王として名乗るに必要な数値です、数値が低ければ低いほど名の有る魔王となります。」

「今の数値は?」

「…今ので丁度3000です。」

「もしかして俺をこの世界に呼んだのは。」

「…私です。」

「俺に数値を下げさせるために読んだのか?」

「…ごめんなさい。」



「俺は普通の人間だし何にも力を持って無い、OK?」

「い、いえ、別にそういうわけじゃ無いんです、ただ…魔王の役…とか出来ませんか?」

「役? 演劇とかなら得意だが…まさか。」

「うう…私、あなたの演劇に惚れ込んでしまつて…ごめんなさい…。」

「俺はまだ売名とかし始めてすら無いんだが…。」

本来はこれからする予定だったが既に知られていたとは…。

「じ、実はですね、数年前の大きな演目での姿を見てからファンになつてしまつて…それ以来魔法で覗き見とかして見てたんですよ。」

「覗き見とか無いわ…。」

流石にドン引きした、気の弱い魔王が魔法の力を使って覗きするとは思ひもしない。

「そんなひどい…あの…もしくは私を、立派な魔王に育てて貰えませんか?」

「は? 既に魔王だろ。」

「そういうわけでは無くて…立ち振舞いとか、声の張りかたとか、そこら辺を…。」

「お嬢様、勇者一行が向かつて来てます…迎撃の準備を。」

「ど、どうしましょう! 私がこんな性格だつて事がバレてしまう…。」

「一つご提案が、日加那樣、大変勝手なお願ひではありますが魔王様を助けては頂けませんか?」

「助けるって言ってもな…俺にそんな力なんて無いし。」

「力なら私が幾らでも貸しますから！取り敢えず立ち振舞って下さい！」

「むう…。」

「じ、じゃあ元の世界に帰します！それでどうでしょうか！」

「…致し方ないか、演技するだけだからな？」

その時にペアと顔を明るくして俺の手を握りしめた。

「ありがとうございます！ありがとうございます！」

「取り敢えず演劇衣装を装着するから待ってる。」

「はい！」

大きな鞆から幅が広いマント、少しボロく仕立てた鎖帷子風衣装、龍の仮面を着けて  
声色を変える。

「んっ…我は…何て名乗れば良い。」

「クリュー…じゃダメなのでクリューダにしましょう。」

「分かりました、我はクリューダ・ブルフェイアルである、良し。」

「完璧ですか？」

「いや、100%ではないですね…ちよつと集中。」

後は意識を集中するだけ…思い出せ、あの人のように…

強く、気高く、本物の王が如く！

「…我はクリューダ・ブルフェイアルである…。」

「…お嬢様より断然素晴らしい演技力です。」

「では王座に案内してくれ。」

「畏まりました。」

それから数分して謁見の間に案内された。

「…武運を。」

メイドさんが素早く姿を消す、転送魔術だろうか。

「クリュー…頼むぞ。」

「は、はい…。」

扉が勢いよく開け放たれ『三人』人間が入って来た。

「よく来た勇者達よ…：そのような非力な姿で我の元にたどり着いた。」

「魔王よ！貴様が働いた悪歴の数々…償えろと思うな！覚悟して貰うぞ！」

「…散るが良い！」

俺の背後からクリューが炎の極大魔法を解き放つ、えげつない威力だ。

「くっ！これが魔王の実力か…！」

「…どうした？もう終いか？所詮人は人、非力な存在には変わりないか。」

「余計なお世話だ！うおおお！」

「ふん…。」

腕をふるい氷魔法が相手に直撃する、もう立っているのも限界のようだった。

「…ここまでか…せめて…あいつが居てくれれば…。」

何やら事情がありそうだと思いきりクリューにアイコンタクトを行い攻撃を辞めるようにした。

「実につまらぬな、なぜそのような非力で我に挑んだ？」

「…お前の持っている財宝の1つに俺達の最後の仲間が患っている病気を直すものがある…世界の平和なんて建前でしかない。」

「ほお？実力不足である上に欲で戦ったと言うことか？」

「なんとでも言うが良い、俺には…どうすることも出来ないからな…。」

「…（その宝は何処に有る？）」

「…（多分財宝庫の奥だと、全然使い道が無いので大分埃被っているでしょうが使えると

「思います。」

「…(すまないがこいつらに譲ってやってくれないか？礼の一つだと思って。)」

「…(別に良いですよ、召還魔法で出しますね。)」

「…(助かる。)」

受け取った宝を膝の付いた勇者達の前に軽く投げる。

「なっ…何の真似だ。」

「勇者ともあろうものが欲で戦う…実に滑稽で愉快であつた、褒美を取らず、持つて行くがよい。」

「…感謝する。」

「我は魔王、故に人間である貴様に感謝される道理はない、早く我の前から去るが良い、我は気が短い。」

「…今度こそ、お前を倒す！それまで…それまで、他の奴に倒されるなよ！」  
「ふん、元より誰にも倒される気など無いわ。」

勇者達が居なくなった所を見計らい、クリューが出てくる。

「お疲れ様でした…本当に格好良かったです！」

「は…疲れた、それより元の世界に帰してくれよ。」

「えーと…それがですね…ごめんなさい！嘘着きました！」

「…は？」

「じ、実は…あっちの世界に物を流すのは…1000ポイント以下じやなきや駄目なんですよ、アハハ…。」

「…今ので何ポイント下がった？」

「た、多分150ポイントだと思えます…。」

「ふざけるなー！」

「い、痛いです！暴力はやめてくださいー！物理は弱いんです！」

「知るか！」

「あの…お楽しみの所を悪いんですが、少しの間魔王をやりませんか？一応お給料も出しますし不自由な生活をお約束しますが…如何でしょう。」

「…給料による。」

「そうですね…ざっと前金で1億円、1000ポイント以下になった時点で3億円出します。」

「…納得はまだしてないけどお金が余り無かったし母さんを安心させてやりたいから、その話に乗った。」

「ほ、本当ですか！」

「うるせえ堕落魔王、お前にみっちり教え込んでやるから覚悟しろ。」

「ひい……！」

「では寢室にご案内致します、荷物をお預かり致します。」

「あ、すみません……。」

「いえ、お気になさらず……魔王様……いえ、お嬢様の事、お願いしますね。」

「……あいつが本当の魔王なんですよ、まだ信じられないです。」

「それはそうです、この間まで一般民でしたから。」

「え？」

一般民……？あいつが？

「……二ヶ月前に交代の時が来たんですよ、以前の魔王は本物の愚か者でしたから始末されたんですよ、他の魔王に。」

「なっ……始末って……まさか。」

「ええ、正確には魔王の力を奪われ首を切り落とされたんですよ……それによつて奪われた魔王の力はお嬢様を選んだ……と言うことです。」

「……あいつは、魔王になりましたかっただけですかね。」

「それは解りません、ただ……覚悟無く引き受けたわけではないと言うことだけ覚えて頂ければ。」

「覚悟……か、まず人前に姿を表すだけでも駄目なのに何で……。」

「着きました、では何か御用がありましたらこちらのベルを鳴らしてください。」  
「どうも…。」

部屋の扉を開けてみると完備、素晴らしい位のベッド、そして何故か仕切りのある空間があった。

「凄い…にしても何だこの仕切り。」

広いベッドの丁度中央に急造で作られたような感じだ。

「えへへ…気に入って貰えました?」

「…ここお前の部屋?」

「そうです…えへ。」

「…。」

続行でベルを連射しメイドさんと呼ぶ。

「如何なさいました?」

「部屋チェンジで、何もなくても良いので個室をお願いします。」

「畏まりました、ではこちらへ。」

「ち、ちよつと待つて下さい! 訳が有るんです! コフィンも止めて!」

「コフィン?」

「私の名です、それより止める意味が分からないのですが。」



「えーと…まだ部屋の整備がまだだったんだよね？」

「10分有れば余裕で仕上げますが。」

「…今日一日で良いので私の部屋で寝てください…いろいろお話したいことがありますので…。」

「ガチ泣きだよ…。」

「ふう…仕方有りませんね、すみませんが今日だけで良いので泊まって頂けませんか？」

「確かにこのまま泣かせて居るのもアレですしね…分かりました。」

「ありがとうございます…お嬢様いい加減泣き止みなさい。」

「あ”り”がどー”ござい”ま”ず！」

「何なんだコイツ…。」

それから結局延々と演技のすばらしさを一晚語られ朝日が昇りメイドに怒られる魔王と言う奇妙な光景を見る羽目になった…拝啓、母さんへ、泣き虫で人見知りの魔王と出会い、魔王代理としてこれから生活するはめになってしまいました、もしこの手紙が届いたら笑って下さい、

## 魔王の覚悟と代理の決意

朝起きたら体が軋む、最近ハードな練習を重ねてたからなあ…。

「…夢じゃ、ねえよなあ…。」

改めて現実を直視すると大きなため息をついてしまう。

「このバカの代わりに魔王…か、結構面倒な事を引き受けちまったなあ…。」

「んんっ…。」

クリューが寝返りをうつとそこには…大きな山二ツと溪谷が有った。

「…あれ？こいつ確か寝る前にパジャマを着てたよな？」

冷静に辺りを見渡すと…：パジャマ一式とイチゴ柄の下着がベッドの脇に落ちていた。

「…変な誤解をされる前に逃げるか。」

それからそそくさと部屋から離脱し、素数を数える、大丈夫だ、ドイツ軍人は狼狽えない。

「何しているんですか？」

「アイエエエエエ!？」

後ろから気配もなく首筋にナイフを当てられる、

「ま、待ってくれ…俺はなにもしちやいねえ！」

「ああ、日加那さんでしたか、これは失礼。」

「ふう…助かった。」

「そう言えばどうでしたか？」

「え？」

「お嬢様の裸体、中々の賜物だったでしょう。」

「ぶはっ…！」

真顔でなんて事を…！

「巨乳、お好きでしょう？」

「嫌いじゃない、と言うか脱ぎ癖あったの知ってたでしょ。」

「さあ…私には分かりかねます。」

「……。」

絶対に確信犯だ。

お母さん、お元気ですか？俺は今、執務室で王政やスケジュールの調整等をさせられています、正直つらいですが中々やり応えがあります。

「はー…朝起きたらクリューはアレだし、王政は大変だし…中々休みが取れないな。」  
横から紅茶が差し出される、コフィンさんだ。

「休憩の合間に手紙ですか？」

「ええ…コフィンさんも休憩ですか？」

「いえ、お嬢様が相当へばっていらつしやつたので何が有つたのかと。」

「演劇のイロハをきつちりと教えてやろうかと、力としては魔王なんですけど度量が釣り合って無いんですよ。」

「確かに…お嬢様は超絶へタレ役立たずですからね。」

「それは流石に言い過ぎな様な気が…。」

「日加那さん、クツキー焼いたんですけどたべませんか？」

「…撤回します、超絶へタレ役立たず魔王でした。」

「…（あれ？私何かしましたっけ…？）」

「で、わざわざクツキーを届けに来た訳じゃ無いんだろ？」

「えへへ…やつぱり分かっちゃいます？一つ提案があるんですけど聞いていただけます」

か?」

「どうした?」

「魔王の能力に霊体憑依機能が有ったの思い出して…これ、持っていて下さい。」

「なんだこれ。」

「私の一部を霊体化して作った魔石です、どんなに離れてても私の力の一部を使える様になります。」

「お前の一部…?」

「はい、頭の方を見てください。」

「あっ…。」

二本有った角が無くなっている、これじゃ完全に魔王として更に見た目が下がってしまっただけ。

「えへへ…見た目としては普通の女の子です、角は良い魔力の塊なんですよ。」

「…お前、ふざけてるのか?」

「え?」

「魔王と言うのは第一印象…つまりは見た目で決まるんだよ、それが普通の女の子?それでは戦う相手にも失礼だろ。」

「でも…。」

「言い訳すんな！…お前に魔王としての自覚が持てなければこれ以上は何しても無駄だ。」

「っ…！」

「コフィンさん、休憩時間が終わったので執務に戻ります。」

「畏まりました。」

少し急ぎ足でその場を離れる、大人気ないけど何か凄くムカついた。

コフィンさんが後ろから付いてきた、まあ部外者がうろちよろしてるのは忍びないか。

「…魔王になるのは強制なんですか？」

「いえ、任意です。」

「辞めることは？」

「可能です、ですが…お嬢様は絶対に辞めないと思います。」

「どうしてそんな言い切れるんですか？」

コフィンさんは小さなため息をつき話し始めた。

「お嬢様には…たつた一人の肉親が居ました、ですが二人で暮らすにはとても大変な位の貧乏だったんですよ。」

「え…？」

「そして決断の時が来ましたが、お嬢様は父に定期的にお金を送ることを条件に家族の縁も、絆も、名字すらも捨て去り魔王になりました。」

「それじゃあ…。」

「ええ、魔王を辞めてしまえば居場所もない名もない、それに父が普通の生活を出来なくなってしまうと言う恐怖で魔王をしているんですよ。」

「…間違っている。」

「え？」

「…ちよつともう一回説教してくる。」

「死体蹴りですか？」

「どつちかって言うのと蘇生だと思っから心配御無用です。」

「なるほど、蘇生系の死体蹴りも有ると…勉強になります。」

「そうじゃないんだけどな…まあ良いや、取り敢えず行つてきます。」

「行つてらっしゃいませ。」

急いでさつききの部屋に戻るとまだ微動だにせず俯いていた。

「…お前、怖いのか？」

「!!？」

「さつきコフィンさんから話を聞いてきた。」

「…慰めですか？あり…。」

「バカか、説教しに来たんだ…俺の師匠の言葉をそのままそっくりお前にくれてやる。」

腕組みをし仁王立ちをして言い放つ

「今を恐れて居るならその自分を越すことだけを考えろ、無理だつたら今を諦めろ、諦め  
たくなかつたら自分を越せ！拒否権は無い！」

結構恥ずかしいなこれ。

「だ、ぶっちゃけ意味はよく解らんし不可解だ、だがな…この状態のことを師匠は『夢』  
と言っていた…クリュー！」

「はっ、はい！」

ガッツリ演劇モードに入ってしまったがまあ気にしないでおう。

「貴様はろくでなしのヘタレ魔王だ、だがお前には変えられる価値がある…前は何がした  
い。」

「私は…私は…。」

『クリュー、お前が魔王になるなんて父さん誇らしいぞ？』

「私は！貴方を越す魔王に成ることです！」



「…明日から練習メニューは2倍だ、覚悟しておけ。」

「はい！コーチ！」

所で2つ引つ掛かりを覚えた。

「…俺魔王じゃなくない？」

「いえ、充分立派な魔王です。」

「あとコーチってなんだコーチって。」

「違いますか？」

「やってることはコーチだけどき…でもなんかトップを狙いそうで。」

「狙っちゃいましょう！目指せ一位です！」

「蹴り入れてやろうか？」

「ぼ、暴力反対です…。」

「また魔王らしくない台詞が出てんぞ。」

「す、すみません…。」

「落ち込むなよ…。」

その時チリンチリンと呼び鈴が鳴った、これはコフィンさんのだ。

「行ってみるか…。」

「わ、私も…行つて良いですか？」

「つか付いてこないと魔王として機能が使えないだろ、早く来い。」

「は、はいっ!」

コフィンさんが若干呆れ顔で待っていた。

「お嬢様…立ち直るの早すぎませんか? もっと落ち込んだ姿を見たかったです…残念です。」

「鬼か。」

「メイドです、それよりお嬢様…クッキーを作るのは良いんですが…作りっぱなしですか…?」

「あつ…。」

「全く…本当に困ったお嬢様です。」

顔はスマイル100%だが後ろに見えるのは覇気を纏った世紀末の覇者だ。

「直ぐに片付けて来ます!」

移動速度上昇の魔法をかけて厨房に行く、あんなスピードで走れば…やっぱり転んだ。  
だ。

「全く…後でタイ式足つぼマッサージの刑ですね。」

「それ滅茶苦茶痛い奴じゃないですか。」

「でも健康にはなるのでご心配無く…それと日加那さん、これからは魔王様と呼ばせて

頂きます。」

「え？嫌ですよ恥ずかしい。」

「半分は城の外でも威厳を保つためです、もう半分はは…乙女の秘密です。」

「決定事項なんですね…。」

「それと私には敬語禁止です、魔王なのですからそんなにペコペコしないで下さい。」

「ええ…わ、わかりまし…。」

「因みに敬語を使うと加点+50するかもしれません。」

「よろしく頼むぞ！」

勢いで演劇モードに入れて加点を回避する、あぶねえ。

「ふふ、では夕飯の準備でも致しますので少し城下町に出てみてはいかがですか？」

「え？そんな某将軍みたいな事して良いのか？」

「大丈夫です、宣伝をしておきましたから。」

「仕事早いな。」

「メイドですから。」

「じゃあちよつくら行ってくる、服装は？」

「一般的な衣装で大丈夫ですよ、財布はそこに金50枚と銀20枚を入れた物があるのでそれをお使いしてください。」

「そんな大金良いのか？」

因みに金1枚で50000円、銀1枚で5000円、銅1枚で500円相等だ。

「ああ、スリだったらご心配無く、ちゃんと魔王様以外が触ったら腕が爆発四散するような魔法を掛けて居ますので。」

「ひつでえな…まあありがと。」

「ふふ、どういたしまして。」

財布を取り一応仮面を着けてクリューの魔石を持っておく。

「じゃあ…行って来ます。」

「はい、行ってらっしゃいませ。」

城の門の所で一人の兵士が虚ろな目で立っていた。

「門番ご苦労、これから少し町にでるから頼むぞ。」

「魔王様…の代理の方ですよね…失礼なことを尋ねますが貴方はまともな方ですか？」

「ああ、一応常識は持ち合わせている。」

「そう…ですか…それは良かった…。」

「ふむ…随分と疲れているようだが休んで無いのか？」

「ええ…恥ずかしながら…。」

「…命令だ、明日から2日休暇を取れ。」

「え？でもそんな…。」

「そんな疲れた顔で門の前に立っていられては安心できるものも出来ん、代わりの者を遣えるから休め。」

「…有難う…：ございます…！」

「礼には及ばん、ただし休暇が終わればまた仕事に戻って貰うからな。」

「はい！」

「良い返事だ、では我は町に出るからそれまでの間頼むぞ。」

「行つてらっしゃいませ！」

国どころか城の中までああたとは…全ては一から…か。

それから露店街まで辿り着いたら少し場の空気が淀み始めたが未だに活気は衰えない。  
い。

「ふむ…随分と旨そうなパンだな、店主！これはいくらだ？」

「銅2枚ですが…。」

「では5つ貰うぞ、銀1枚で足りるか？」

「魔王様からお金を取るなんて…そんな恐れ多い事出来ませ…。」

「愚かな事を言うな、王とて払うものは払う、それとも我の顔に泥を塗るつもりか？」

「いえ、あの…毎度。」

「ふっ、また来る。」

紙袋から一つパンを取り出して食べようとするが仮面を被って居たことを忘れていた。

「我としたことが…。」

仮面を外しパンを食べる、焼きたてだったため結構熱かったがとてもふつくらしてて食べたことがないくらい美味しかった。

「うむ、旨いな。」

次に目についたのは見たことがない赤い実だった。

「婦人、これは甘いか？」

「は、はいっ！うちのコルマの実は絶品のハズです！」

「そうか、一つ貰おう、いくらだ？」

「銅5枚で…お釣りの銅5枚です。」

「うむ、そんなに畏まらんでも良い、次に畏まったら懲罰な。」

成る程、自分で使ってみて分かった。

滅茶苦茶効果覲面やん…。

「さて…と、メイド長からとやかく言われる前に帰るか。」

帰路に着こうとしたらなにやらナイフを持った男が複数出てきた。

「なんだ貴様らは。」

「へっ、フー盗賊団のしたつぱだよ魔王サマア。」

「ふむ、要約すればごろつきの集まりか、それが何のようだ？」

「怪我する前にその財布を出しな。」

「こいつら…では痛い目に遭わせよう。」

「そうか、では持っていけ。」

財布を地面に放り仮面を被る。

「へっ、話がわかんじゃねえ…ぐあああああ！」

ごろつきが財布を拾った瞬間に腕が爆発した。飛び散った腕は最早灰所ではなく塵になった。

「どうした？拾わぬのか？」

「て、てめえ…何しやがった！」

「ああ、言い忘れていたがメイド長が我以外が触ったら爆発する魔法をかけていたと言うことを忘れていた、許せ。」

「舐めやがって…！ぶっ殺してやる！」

飛びかかってきたが腕を軽く振り、真空波がごろつきの体を吹き飛ばした。

「脆いな…民の平穏を破り去るようならこの場で消すが…どうするっ！」

「っ……！逃げるぞ！」

走つてころつき達が逃げ去つた際に何か袋を落としていった。

「これは……？」

「あ、あの……大変申し上げにくいのですがそれさつき私の店から盗まれた宝石でして……」

「そうだったのか、中身を確認せよ、足りないものが有れば我が兵を出し取り戻しに行こう。」

「で、では失礼して……全部無事です！ありがとうございます魔王様！」

「うむ、次からは防犯用に束縛魔法でも覚えておけ、何かと役に立つ。」

「は、はい！」

町で行動をして知名度を高めない……前の奴がやったことを忘れずに、もつと良い事をしないと……。

それから普通に帰路に着き、門番の手配と町の治安の強化を命じて一息つく。



「はー…結構疲れたな。」

「お疲れ様です、今食事をお持ち致しますね。」

「ありがとう。」

「お嬢様を添えて。」

「oh…。」

あいつ食事中にべらべら喋るからなあ…。

「ご指名有難うございます！クリユ…。」

「チエンジで。」

「畏まりました。」

「え!?!ちよっ…冗談じゃないですか！羽交い締めしながら部屋から出そうとしないで下

さし…。」

「うん、まずは何で魔王がキャバ嬢の真似しながら入ってくるんですかね？」

「えーっと、それは…。」

「男性の好みを聞かれたのでキャバ嬢かスクール水着か花魁系の着物くらいかなと。」

「偏屈すぎるわ！」

「このメイドは危険すぎる。」

「さて、お嬢様で遊ぶのはここまでにして…。」

「遊んでたんですか!？」

「はい、遊んでました。」

「っ……!？」

シヨツクの余りガ〇スの仮面みたいな顔になっている。

「それで？今晚のメニューは？」

「ハンバーグです、暇だったので歌って踊りながら作りました。」

「怒られてしまえ。」

でも食べたなら凄く美味しかった。

夕食後、ようやく用意された自室で一息ついているとノツクの音が転がった。

「はいほはいほーっと。」

演劇ようぐをカバンに入れてからドアを開けるとクリューが居た。

「どうした？」

「えへへ……遊びに来ました。」

「うん、黙って寝てろ。」

ボタンと戸を閉めると戸を叩き始めた。

「うるせえ！新聞の受け売りは結構だ！」

「そんなひどい…。」

いや、お前は新聞業者だったのかよ…。

「…入れ、つっても遊ぶもんなんて何にも…。」

クリューの後ろを見てみると大量のボードゲームが鎮座していた。

「私の部屋に置いてあるものをありったけ持ってきました!」

「オセロ以外全部置いてこい。」

「えー…。」

「早く。」

「うう…持ってくるのに苦労したのに…。」

とぼとぼと浮遊魔法で持ち上げながら部屋に戻っていった。

「今がチャンスだ。」

戸を閉め鍵を掛ける、これで入って来れ無いはず…。

「鍵を掛けるなんて…結構大胆なんですな…。」

「…何故居る。」

「コフィンさんがボードゲーム一つ一つにポータルを設置したのでそこをちよちよいと

…。」

「おのれ…孔明の策か…!」

「どうやら諦めて遊びに付き合うしかないようだ。」

「えへへ…夢だったんです、親以外とこうやってボードゲームするの。」

「ボツチか…友達も居ないなんて可哀想に。」

「友達位は居ますよ!?!…犬ですが。」

「ボツチじゃねえか。」

「割りと本気でボツチだった。」

「む…じゃあ私が勝ったらボツチなんて呼ばないで下さいね。」

「ああ、その代わり俺が勝ったら…指一本を貰おうか。」

机の上にナイフを突き立てる。

「ひっ…!」

「俺は一切手を抜くつもりは無いが…どうする?」

「な、何か…荒野に居るギャングの首領みたいです…」

「話を逸らすんじゃねえ、誇りか指か…早く選べ。」

「指でお願いします…」

よし、これで調子に乗ることは無くなったな。

それから普通にオセロを初め、おどおどしながらクリューが尋ねてきた。

「そ、それにしても…随分と演技の幅が広いんですね。」

「まあ、悪役に徹することを主にして練習してきたからな。」

「何で悪役を？」

「…バカみたいだが、俺の中で一番かつこいいのは悪役だ、だからその背中を『踏み倒すために』俺は悪役に徹する、更に俺の背中を見せないために早足で駆ける、それだけだ。」

「踏み倒す…追いつくんじゃ駄目なんですか？」

「まるつきり駄目だ、追いついたとしてその先に何を得るかが一番重要だからな。」

「成る程…他にはどんな悪役を出来るんですか？」

「脱出劇の黒幕とか軍の総帥とかだな。」

「本当に悪役ですね…。」

「かつこいいからな、これで終わりだ。」

白が多かったのに一つの手で一気に黒に変わるとクリューが驚いた。

「あ、あれっ？さつきまで私が優勢だったのに…。」

「それにしてもお前は悉く罠に掛かるよな、更にはこことここ、更にここも落とし穴だ。」

「でも沢山取れてたし…あつ。」

「やつと気付いたか、お前は全体を見る目が無いな。」

「じ、じゃあもう一回…。」

「その前に…さ、好きな指を選べ。」

「え!? さつき指を取るって…。」

「俺は賭けるものを選べと言ったんだ…覚悟は、出来てるな?」

「ひっ…ひやああああああ! ごめんなさい!」

凄いスピードで逃げたしていった、冗談なのに…。

「脅かすぎたかな? まあ良いか…ふああ…もう寝るか。」

オセロを廊下に置き、鍵を閉める…が、何か立て付けが悪いせいでガタガタする。

「あのやろう…コフィンさんにチクってやろう。」

それはまあ明日で良いか、取り敢えず寝るためにベッドに寝転がる。

「俺が魔王代理…か、俺もそれなりの覚悟を決めないとな。」

これから起こることは全く予想さえも出来やしないこの世界で本当にあいつを…クリューを立派な魔王に出きるのだろうか…あいつは優しい性格だから途中でギブアップするかもしれない…だとしたら、俺が…。

「いや、俺は元の世界に戻るんだ…あの人の約束を守るために…!」

布団を被り眠りにつく、明日は…どんな事が起こるのか…な…。

次回「リザードウーマンの一週間（前編）」

## リザードウーマンの一週間（前編）

朝の日差しがカーテンの隙間から差し込むなか、もう少し寝ようと布団をひっぱ…なんだ？ 妙に布団が重いな…。

振り向くとそこにはアホ面晒しながら寝ている魔王が居た。

「どうやって入ってきた…オセロは廊下に置いてたし、鍵も閉めてた…え？」

ドアは丁度クリューの形をした穴が空いていた、となると…。

「こいつに壁と言う概念が無いのか？」

取り敢えず起こさないようにベッドから降りてコフィンさんの元に行く。

「ここのはず…コフィンさん、居ますか？」

「あら、魔王様…何か用ですか？」

まるで伝説の傭兵みたいな目をしながらタバコを吹かし、鉈を研いでいた。

「ちよつとクリュー案件で…ドアに穴が開いたからどうかして欲しいんだけど…。」

「…お嬢様はどちらに？」

「俺の部屋で寝てます。」

「成る程…あ、魔王様も吸います？」



「あ、どうも…。」

ライターとタバコ一本を貰い火を付ける。

「…ふう、それにしてもコフィンさんもタバコを吸うんですね。」

「ええ、ストレスのかかる仕事なので。」

「出来るだけ負担は増やさないようにするから…ホントごめん。」

「いえいえ、気にしないで下さい…一人メイドが辞めちゃったのでその穴埋めをお嬢様にやらせましょうか。」

「完全に転職しそう。」

「ふふっ、確かにそうですね…そろそろ着替えて朝食を作りますからこれでお嬢様を起こして来てくれますか？」

さつきまで研いでいた綺麗な鉈を手渡される。

「…え？」

「ああ…急所は駄目ですよ、それには魔族特攻50倍の呪いが掛かっているので一撃死になってしまいます。」

「普通に起こしてくる!」

割りど目がマジだった、本当にストレスが溜まってるんだろなあ。

部屋に入り適当に借りてきたシンバルを手に持ち、耳栓を付ける。

「さて、これで……！」

思いつきりシンバルを叩くとクリューが目を覚ました。

「キヤアアアア！」

「おはよう、さつさと服を着て顔を洗ってこい。」

「…キヤアアアア！日加那Ⅱサン!?何でここに!?!」

「ここは俺の部屋だ、そしてこの風穴に見覚えは有るか?」

「えつと…確かトイレに行つて…何かドアが空かないからこの間文献で見たマッスル何とかみたいな穴を開けた記憶が有ります。」

駄目だこいつ…早くなんとかしないと…。

「…次から魔族特攻50倍の鉈を借りようかな。」

「え!?!」

「じゃあ俺は先に行つてるから遺書でも書いとけ。」

「何か凄い不吉な事を言ってるんですが!?!」

クリューをほったらかし執務室向かい、溜まっているこの国の問題を一纏めにしてもらった資料に手を付ける。

「働く鉱山の不足…か、働き手が居ても働く場所が無いなら意味がないよな、それに海の領土が結構広いから密漁者も増えてきている…監視区域を少し広め、残りの部分は他の領土と交換…広めると同時に給料を増やし少数精鋭の交替で行こう。」

後はスラム街の活用と治安を乱す者達の徹底的な排除を考えなければ。

「スラム…か、働き手になるやつが居るはずだから果実酒量産をさせよう、給料は…果実酒の売上四割で、チラシを作成しなきゃ。」

残りは…。

「…最問題だな、この国はならず者が多すぎる。」

以前は前任者と面識が有つたらしい…本場に屑野郎だな。

「現在の大きめの集団は…フー盗賊団、レイゲア教団、バノデア大海賊団の三つか…やっぱり最初に対処しなければいけないのはフー盗賊団だな、こいつらは人拐いから強盗も、更には小さな村を幾つも襲っている…規模のデカイ山賊じゃないか。」

アジトの場所は…まだ見つかってないのか。

「…誰か分かる奴さえ居たらな。」

そう言えば町に名うての情報屋が居るんだったかな、相当高額の値が張るがその情報は百発百中、何でも知ることが出きるらしい…のだが。

「神出鬼没過ぎる…頼るのは難しそうだ。」

…後は、奴隷制度…だな。

「…この世界に根強く張ってるし、かのリンカーンですら難しいだろうな。」

俺には良くわからない価値観だが…これでしか生きられない人間が居ると言うことだ、なら…。

「もつと生きられる国を作るしかないだろうな。」

全ては俺の手にかかる、それはとてつもなく重くて大きいものだが…魔王代理となつた以上、やらなければいけない問題だ。

「魔王様、朝食が出来ました。」

「ありがとうございます、すぐ行くよ。」

…価値観の押し付けは良くはないと思うが、これだけでも変えなければいけない、絶対に…。

朝食を食べ初めるが色々と見慣れない食べ物が見前に広がる。

「…これは？」

「プノセと呼ばれる豚みたいなもの肉です、豚肉よりもより柔らかく、カロリーも低い

と一般にも愛用されている肉です。」

「へえー…この果物は？」

「○ボンの実です、HPが満タンの状態で使うと上限が少し上がる代物です。」

「…マジで○ボンの実？」

「はい、農家のワーウルフが面白そうという事で作ったらしいです。」

「面白そうだけで作れるのか…。」

それにしても本当に美味しいな。

「コフィンさん！おかわり！」

「三杯目ですよ？太つても良いんですか？」

「うう…じゃあ我慢します。」

後頭部に四段アイスクリームみたいなたんこぶを乗せてコルマの実を食べるクリューが居た。

「コフィンさんエ…。」

「ふふ、軽いお仕置きです。」

「これを軽いと言うのか。」

「そう言えば食事が終われば謁見の間に向かってくださいね。」

「え？何で？」

「魔王様に会いたいと言っている者が居ましてね、取り敢えず謁見の間に待機させています。」

「無断で通したの!？」

「ええ、多少面白そうな方だったので。」

「この人(?)は面白さで通すのか…。」

「何か問題が?」

「問題しかないと思うんだけど…まあ良いや、俺の演劇衣装は?」

「こちらにございます。」

「どうも…って随分キレイになってるな。」

「ええ、魔法でちよちよいとキレイにしました。」

「ありがとう、さて…行くか。」

王座に急ぎ着き、演劇モードに入る。

「…入るが良い。」

扉がまたしても勢い良く開けられた、いい加減金具が壊れそうだ。

「し、失礼します！」

「金具が壊れそうだからもう少し加減して開けろ、して名はなんと申す。」

「あつ…す、すみません！私はリザードマン一族のゼナと申します！」

「そう畏まらんでも良い、それより用件は何だ。」

「わ、私を…私を！魔王様の側近にしてください！」

「ほう…面白いことを言うな、目的は何だ？」

「…女のリザードマンは弱いなんて言われたく無いからです…そんな偏見で仕事に就けなかったり、バカにされたりして…だから私はここで大きく名を馳せて男女平等に働ける様にしたいです！」

…志は上等だな、じゃあ少し実力を測るか。

「ふむ…では期限は一週間、その間に功績を上げよ、何も出来なければ立ち去る事だ。」

「あ…有難うございます！」

「部屋を用意しておく、まずは基本知識をメイド長から教わると良い。」

転移魔法で謁見の間から離脱し脱力する。

「…疲れた、朝食吐きそう。」

「魔王様、お疲れ様です。」

「あ、コフィンさん…勝手に決めてしまつてごめんね。」

「いえ、今は貴方が魔王なのでですから気にしなくても大丈夫です。」

「…正直、どう思いますか？」

「あのリザードマンの事ですか？大して怪しくは無いと思いますが。」

「差別の事です、やっぱりこの世界にもそんな下らない事があるんですね。」

はあ…とため息をつき、口を開く。

「…部族というのはバカみたいに誇りが高いんですよ、そんな誇りのために同族を貶めるなんてしよっちゅうです。」

「…一つ、俺に良い考えが有ります。」

「コン○イ司令官ですか？」

「茶化さないで下さい。」

「冗談です、で、良い考えとは？」

「それは…。」

クリューに聞こえないように少し小声で提案すると小さい笑みを浮かべた。

「…成る程、それは面白い提案ですね。」

「あとは彼女がどうするかですね…。」

「…楽しそうですね、混ぜて良いですか？」

「おう、じゃあどんないじられ方が良い？」



「え？」

「どうやってお嬢様をいじってやろうかと思ってたんですが…既望は有りますか？」

「あの…ちよつ…。」

「取り敢えずメイド服でも着せるか、もし駄目だった時のために…な？」

「ふ、不吉な事を言わないで下さいよ…コフィンさんもなんか…。」

「ビスチエでも着せて婦館にでも構いませんよ？」

「ひっ…ひいひいやああああ！」

孟ダツシユで逃げていった、これで良し。

「コフィンさんのそのノリ好きだよ。」

「恐縮です。」

さて、そろそろ仕事に戻るかと思つたが変な音が近づいてくる。

「む？何だ？」

テラスの方を見てみたら飛行機みたいな物が近…白いドラゴン!? え!? ちよつ…。

「はっ!」

コフィンさんは飛んできたドラゴンを…何処から出したか分からないハリセンで叩き落とし、追撃に蹴りを一撃入れてクルリと戻つてきた。

「ほっ…と、全く…うるさいハエですね。」

「え？何が起きた？」

「ハエを叩き落としただけです、気にしないで下さい。」

「ちよいー！いきなり叩き落とすなんて酷いじゃないですか！」

あ、また羽ばたいて戻ってきた。

「あら、まだ生きてたんですね…止めを刺しますか。」

さつき渡ししかけた鉈を引き抜き、迅速に斬りかかった。

「死ぬ！それ死んじやいますからー！」

「ならば帰りなさい！素早く！」

「帰る！帰るからこれを魔王様に！」

首元にくくりつけてるポーチから巻物らしきものが出てきた。

「…これは？」

「コフィンさんの似顔絵ー。」

ズバツと軽く羽に斬りつけた。

「つだあああああ!!？」

「二度と飛ばない体にされたいようね…後悔なさい。」

「嘘ですから！神様からの書状です！」

「…ふうん、あの糞神も分かっているものですね。」

「どしたん？」

「魔王様の代理の承認です、もしダメ人間が代理をしてしまったら…この国が消滅してしまいましたから。」

「ええ?!」

「クソゴミカスSEKAI NO OBTUである前任の魔王がアレ過ぎたせいですね、全く…死んでくれて大助かりですよ。」

「ボロクソ言ってるけど俺もそう思うわ。」

「…?、何故まだ居るのかしら、死にたいの?」

「ええと…その書状の最後を見てもらうと分かるんですが…。」

「……………ふん!」

宙に放り投げたかと思つた瞬間に強力なミニ竜巻がき起こり、微塵になつてしまつた。

「書状は微塵と化してしまつたので分からなかつたです、もし間違えてしまつたなら…新しいのを取つてきなさい。」

「ひい…!」

「何て書いてあつたんだ?」

「…御礼の品としてこいつを寄越すとのことですが、どうせ間違えでしたので…きびきび

動くー！」

「そんなあ！ それじゃ私帰るところ無くなりますよ！」

「あら、お似合いじゃない。」

「コフィンさんが珍しく感情を大きく表に出してる…。」

「でも残念だな…せっかくドラゴンに乗れるチャンスだったのに…。」

「!!、それって…！」

「魔王様、ドラゴンだったらもつと格のある黒龍がございますが。」

「マジで？じゃあ黒龍で。」

「私人にも竜にもなれる2way機能付いてます！」

「…黒龍の方が良いかも、だって文字も竜じゃなくて龍だし。」

「そこは我慢してください！」

「…コフィンさん、こいつ飼って良い？」

「……………はあ、魔王様が良いなら構いませんよ。」

「凄く渋ったね。」

「そりやそうですよ、全く…。」

「どうしたんです…あつ…。」

クリューが異変に気付き、戻ってきたところで白竜を目を合わせ…倒れた。

「クリュー!？」

「し、しりよい…トカゲ…。」

カクンと頂垂れた、気絶してしまったようだ。

「と、トカゲって…。」

「ねえ今どんな気持ちですか？神の使いとして降りてきたのにトカゲと間違われたとか  
どんな気持ちですか？」

「う、うわあああん！コフィンさんがい”ぢめ”る”ー”」

「うるせえええええ！」

結局朝から相当疲れる羽目になった。

クリューを医務室まで運び、庭で騒ぎの張本人と対峙する。

「はあ…おいトカゲ。」

「魔王様もトカゲ呼ばわりっ!？」

「名前わかんねえんだもん。」

「私の名前はカメイア・フォイアです！決してトカゲではないです！」

「そうか、じゃあ亀で。」

「亀!? 簡略化し過ぎじゃないですか!?!」

「じゃあトカゲで決定な。」

「うう…亀で良いっすよお…。」

項垂れてシユンとしてる、このまま黙っててくれると助かるのだが…。

「さて…邪魔だからさっさと人になつてくれ」

「ええー、いきなりっすかー?」

「死にたいか?」

コフィンさんと呼ぶ呼び鈴を軽く手で摘まむ。

「ちよ、それはマジで冗談にならないので!」

「なら早くしてくれ、予定が詰まってるんだ。」

「うう…変身。」

ボフン!と煙幕を立てて大きな影が消え…ちんちくりんなマイクロピキニの女の子が立っていた。

「……。」

「……キャアアア! 変身!。」

「またもや巨大な竜に変化し、速攻で飛び立った。」

「…執務の続きだ。」

執務室にそそくさと逃げる、それにしても残念な体だったな…。

く一日目く

朝食後に書類を纏める為、執務室に向かったところ、あのリザードウーマンがメイド姿で佇んで居た。

「あ…魔王様！御待ちしておりました！」

「ゼナ…だったか？業務はもう少し後だと伝えた筈だが…。」

「はっ、メイド長から通常運転の魔王様の姿を覚えておけと命じられ、現在に至ります！」

「そうか…じゃあ気を張る必要は無いな。」

ふっと体の力を抜き、緊張させないように微笑みかける。

「今日から一週間よろしくな、手は抜かないから覚悟しとけよ。」

「あ…は、はいっ！」

元気の良い返事と共に執務室に戻り、分厚い資料をや書類片付けを始めるのであった。

それから三時間位が経つか経たないか位の時間が過ぎた頃、ある程度纏めた書類を片付け、コフィンさんと呼ぶ鈴を鳴らした。

「魔王様、何かご用でしょうか？」

直後に転送魔法で飛んできたであろうコフィンさんが現れた。

「ちよつと息抜きにお茶を良いかな？あ、二人分頼む。」

「畏まりました、直ぐに御用意します。」

直ぐに姿が消え、ゼナがキョロキョロと辺りを見渡す。

「これから誰か来るんですか？」

「お前のだよ、適当にそこに座れ。」

「そんな恐れ多いこと…。」



「右腕目指すんだろ？ だったらどしつと構えとけ、それとも只の秘書とか専属メイドに  
なりたいのか？」

「…では失礼します。」

執務デスクの前にあるよく校長先生の部屋にある感じの机とソファアに腰掛け、こじ  
んまりと座る。

「…あのなあ、そんなにびびらなくても良くないか？」

「びびるって…。」

「それとも…このように気を張った方が良いか？」

少し演劇モードに入るとビクツとし、さらに縮み上がる。

「…ふう、明日辺りスラムの交渉に行くから付いてこいよ。」

「えっ…あの、私が付いて行って良いんですか？」

「ああ、その代わり強気で居ろよ、俺の顔に泥塗らないために…そして何より、お前がや  
れると言う事を見せつけるためにな。」

「…はい！」

「お待たせ致しました、今日はオールグレイ茶と付け合わせにドーナツです。」

「ありがとう、あれ…三人分？」

「実は私も休憩中でしてね、ご一緒させて頂きます。」

「拒否権無しっすか。」

「ええ、あの厄介なトカゲをペットにしたのですもの、それなりの見返りを…期待しております。」

営業スマイル100%だがオーラがどす黒い、やめときや良かったと後悔する。

「ふう…ああ、明日からお嬢様も同行させてあげてください、今自室でいじけて一人チエスしてらっしやるので。」

「ほんつとアイツ友達居ないのな。」

「ええ、本当に笑え…げふん、悲しい限りです。」

「あんた今笑えるって言ったか!？」

「幻聴です。」

「でも確かに…お?どうした?」

隣で話を聞いていたゼナは頬袋をパンパンに膨らませ、笑いを堪えてた

「…ちよいや。」

腋に一闪が如き突きを腋に御見舞いし、頬袋を決壊させる。

「だはーっ!何すんの魔王様!」

「お、それがお前の素か。」

「あ…ええと…これはなにかの…。」

「天破活……！」

「う……これが私の素だよ、がさつで悪かったね！」

「それで良いんだよ、淑女なんて求めてもない演技を下手にされてたら落ち着かないからな。」

「下手つて……じゃあ魔王様は演技が……。」

「ほお……我に楯突くか。」

「っ……！」

少しだけ演劇モードに入ると肩を小さくし、大人しくなる。

「どうよ、もしギャフンと言わせたいなら精進することだな。」

「むう……魔王様は怖くないの？」

「怖くは……無いな、俺が一番怖いと思ってるものは最近更新されたコフィンさんのあの笑顔だ。」

「加点50です。」

地雷踏んだか。

「……まあこんな感じだ、ゆっくり慣れてくと良い。」

「あ……はい。」

「じゃあ今日はコフィンさんから色々教えて貰ったけ、明日から本格的にコキ使わせて

貰うからな。」

「あ…分かりました。」

軽くお辞儀し、部屋を出ていく。

「…さあて、夜までお仕事頑張るか。」

「じゃあ私は徹底的にしごかせて貰いますね。」

「…ほどほどに頼むよ。」

「ふふ、じゃあ私も失礼します。」

転送魔法で消えたかと思うと飲み終えた紅茶セットも消えていた、抜かりないなあと思いつつもまた書類に向き合い直し、山のような書類を消化し始めるのであった。

次回 「リザードウーマンの一週間（後編）」

## リザードウーマンの一週間（後編）

（二日目）

「日加那さん！起きてくださいー！」

うるさい声と共に叩き起こされる、全くこいつは…。

「朝ですよー！起きてくださいーい！」

「…お前に起こされたかと思うと本気で死にたくなってきた。」

「そこまで!?!」

「と言うかよく起きたな、一生分の運使いきったか？」

「ち、ちがいますよ…コフィンさんに叩き起こされて『せめてメイドらしいこと位はしてください。』って言われて…。」

「…終わつたな、まあメイドとして頑張れよ。」

「何で肩をポンと叩いて去ろうとしてるんですかあー!?!」

騒々しい物が後ろに張り付いて来るがあえて無視して今日のスケジュールを確認する。

「今日はーつと…スラム果実酒計画の最終確認面談、土砂崩れ整備の人員配置、クリューの特訓…後は兵士の備品補充だな。」

「魔王様！おはよう！」

通路で待ち伏せしてたであろうゼナが声をかけてきた。

「おつ、今日は私服か。」

「はい、流石にあんなヒラヒラした奴はちよつと…。」

「だよなあ、あとこれ今日のスケジュールだから馬車の手配と書類の抜けが無いかチェックを頼む、わからない所はコフィンさんに聞いてくれ。」

「分かったわ…あと後ろのその人は？」

「あ…。」

完全にこいつをどうするか考えて無かったわ…。

「えーつと…俺の弟子みたいなものだ。」

「え、ええつと…クリューです、よろしくお願いします。」

「弟子？」

「ああ、名前が似てることから採用したんだが…。」

「名前が似てるだけで？」

「面白さから門を通されたお前が言えんがな。」

「…確かに言われてみれば私の方が不自然すぎる！」

むしろ疑問に思わなかったのか。

「んじやあお前も自己紹介な。」

「えつと…私はリザード一族のゼナ、出稼ぎみたいなものだけど魔王様の右腕になるためにここに来た、よろしく。」

クリューをチラ見してみると…。

「はわわ…！」

顔が青ざめて人の後ろで軽く震えてる、人見知りかコイツ。

「…まあアレだ、度胸をつける修行もやってるからな、多目に見てやってくれ。」

「えつと…うん、わかった。」

「じやあさつき言ったこと頼んだ、あと出かける準備をしといてくれ。」

「はい！じやあ失礼します！」

駆け足でコフィンさんの元に走っていったら袖を握って居たクリューの手が離れる。

「…大丈夫か？」

「…はい。」

一応頷くがまだ顔色が優れてない、無茶しようとしているのが手に取るように分かった。

「はあー…ちよつと休んどけ、夕方の特訓までもたないぞ。」

「分かってます…でも、今日も一人になるのは嫌です、日加那さんの隣は…絶対に譲りたくありません。」

「……。」

全くこいつは…無駄なところで意地っ張りなんだな。

「…わかった、でも無茶すんなよ。」

「分かりました！」

「じゃあお前にも仕事をやろう。」

「はい！」

「一旦ハウス！」

「はい……。」

とぼとぼと部屋に戻るのを確認したら移動しながら演劇衣装の仮面を被る。

「…あー…あー…ヴうん！」

大きく咳き込み、声の総仕上げを行う。

「…下がれ、我はクリューダ・ブルフェイアルであるぞ！」

「ははっ！」

「…コフィンさんや、いつからそこに？」



「咳き込んだ辺りから。」

「うわー…、聞かれてたか…。」

「別に恥じることでは無いと思いますよ？」

「でもなあ…と言うかどうした？ゼナがコフィンさんの所に…。」

「待ってくれえー！」

ゼナが息を切らしながら走ってきた。

「はあ…はあ…コフィンさん！何で逃げた!?!」

「魔王様をからかえる気配がしたのでつい。」

「ついっておま…。」

「なあ…遊んでる時間は無いんだが…。」

「あつ…。」

しまったと言わんばかりに驚愕の声を漏らしてしまったらしい。

「出来るメイドと言うのは違いますよ、馬車はもう城の前に止めております、書類の抜けも御座いませぬ。」

「マジか、よしクリュー呼んで行くぞ。」

「その前にこれを。」

「これは？」

「お弁当です、三人分あるので取り合わなくても良いですよ。」  
「助かる。」

弁当を受け取った瞬間に首筋にキスされた。

「ひゃああ!？」

「んう…お嬢様はもう馬車に乗せてあるのでご心配なく。」

変な声をあげてしまった…ゼナをチラッと見てみると。

「ふうん…魔王様はこう言うのが好みなんだナー。」

ガラスの破片が如く視線が突き刺さる、そんな目で見ないでくれ。

「…ええい！急ぐぞ！」

「ふふ、行つてらつしやいませ。」

小悪魔みたいに微笑み、片手を振って見送つてくれる。

「行つて来ます。」

馬車に駆け込み、教えられた通りに出来るだけ飛ばすようにする。

「あ、安全運転でお願いしまーす！」

「うるせえ舌噛むぞ。」

頭にげんこつを打ち込み、軽く黙らせる。

「ハーツ！」

うわ本当に早く動き出した。

「よし、これなら余裕で間に合うな。」

「はー…本当に魔王が直々に来るんですかねえ。」

「さあな、来なかつたら来なかつたで金を踏んだぐるさ。」

「そりゃい…兄貴！孟スピードでこっちに突っ込んで来る馬車が！」

「はー!?!」

「おおおお!?!間に合ったか!?!」

「ギリセーフだ魔王様！」

「じゃあ…生まれエエエ！」

急なブレーキをかけたためクリューの胸がだゆんと揺れた…ってそんな事はどうでも良い。

「すまない、待たせたか？」

「あ…あなたが魔王様かい？」

「ああ、ちと時間が無かったものでな、粗暴な走りを見せてしまった。」

「いや、てつきり上品に来るのかと思いきや…はっ！随分と面白い人のようだ！野郎共！」

「む？」

「ずらつと所々の廃屋から子分と思われる奴等が出てきた。」

「歓迎しよう、ここに居るのはスラムの人間全員…俺の子分達だ。」

よくみると小さい子やリボンを着けた魔物も居る。

「俺はワーウルフのハート、あんたは？」

「クリューダ・ブルフェイアルだ。」

軽い握手を交わし、早速同意書と朱肉を用意する。

「ほー、随分と大きい装置やら洗浄器具が導入されるんだな。」

「型落ちした魔術式だがな、場所はこのスラムの広い空地…まあ前魔王城跡地とでも言っておくか、ここはどうだ？」

「予算的な問題も汲んでいるのでこの話を通さない限り道はない。」

「おう、俺もここが丁度良いと思ってたんだよ、で…報酬が売り上げの四割だったか？随

分と羽振り良いじゃねえか。」

「その事なんだが…まさかここまで協力者居るとはな、報酬を五割に引き伸ばしたい。」

「良いのかよ、あんたがマイナスになっちゃうぜ?」

「構わん、こんな国の状況を変えるにはこれしかないからな。」

眉間にシワを寄せ、ナイフを机に突き立てられた。

「…あんた、何企んでる?」

「…我は魔王であるが故に王であることを強いられる、王であれば民を導かねばいけぬものであろう?」

「そうだけだよ…ここまでやる必要は無いんじゃないか?」

「いや、前任者の尻拭いをせぬ限り我は魔王として名を語れん、であれば良き王になるしかあるまいよ。」

「王、か…名前ばかりだと思っていたがあんたは違うようだ、おい、お前らは一足先に広場に戻つてろ。」

「兄貴、良いんですか?」

殺気を放ち、ナイフを地面に投げ刺した。

「うるせえ、話をしてえんだ。」

「っ、分かりやした…行くぞ!」

子分と思われる小僧が全員を引き連れて目的地であろう場所に向かっていくと、ハー  
トが口を開いた。

「なあ…あんだ、人間だろ。」

「…いつから気づいてた？」

「はっ、最初からだよ。」

「そうか…すまない、騙すような事をしてしまった。」

「いや、むしろ都合だ。」

「どういうことだ？」

机の上に小さい小箱をトンと置いた。

「これは？」

「知らないのか？さては外界の人間だな。」

「ああ、説明して貰えると助かる。」

「コイツはアーク、禁忌の箱だ。」

「禁忌の箱？」

「おう、トンでもねえ力を秘めているクソツタレだ。」

「どのような力が？」

「そーだなあ…ポイント増加を防ぎ、願いを叶えられると言えば簡単か？」

「どうしてそのようなものを持っている。」

「前魔王から盗み取った、奴の力の源といつても過言では無かったからな、まあおかげで片目が見えなくなっちゃったがな。」

閉じた片目を擦り、遠い目をしていた。

「…どうしてそれを私の前に出す、まさか返すとは言わないよな？」

「そのまさかだよ、あんたは人間だから使えて二回程度…だったら返納しておこうと思ってるな。」

チョンチョンと脇を突きクリューが不安そうな目でこつちを見てくる。

「…結構だ、お前が持っていてくれ。」

「そうか？まあ必要になったら言ってくれ。」

「では我は一度帰る、これからよろしく頼むぞ。」

「ああ、その前に1つ教えてくれ。」

「何だ？」

「アンタ自身の名前を教えてください。」

「…日加那、日加那享だ。」

「ヒカナ…分かった、ありがとよ。」

「では去らばだ。」

今度はゼナに運転をさせ、ゆっくり馬車の中で弁当を食べながら備品の発注書を届け、魔王城でクリューの特訓をし、明日に備えて早目に眠りについた。

～三日目～

「今日は…書類の判子押しだけか。」

「じゃあ私買い物に行ってきたても良いかな？」

「おう、行ってきな。」

「じゃあ行って来ます！」

忙しく駆け出し、乱暴にドアを閉めていった。

「…コフィンさん、ちよいと。」

「はい、何でしょうか？」

「アークについて説明して貰えるか？」

「アークですか…分かりました、軽くですが説明させて頂きます。」



どっから出したか分からない三角メガネと教鞭を装着し、スーツ姿に変わった。

「本来アークと言うのは神からダビデ王に授かりし「死」そのものを呼び出す宝具、ですがその力を操る力を持つていればただの願いを叶える道具に成り代わりると言う代物です。」

「…それって不味くない？」

「ええ、ですが前魔王はそれを躊躇いもなく使っていました、お陰で天災や不幸な知らせがバンバン届くように…。」

「最悪やん！」

「まあ元騎士団長の方が奪い去り、守るものも無くなったと言う訳です。」

あいつ騎士団長だったのか…。

「それにしても何故アークを？」

「あー、実はかくかくしかじかで。」

「成る程分かりました。」

「分かるの!?!」

「ええ、首筋にキスをしたでしょう？アレ実は盗聴用魔術だったんですよ。」

「魔術だったんかワレ。」

「ふふ、まあ護身用に張らせていただいた程度ですけどね。」

「まんまとやられた…。」

「さ、まだまだ書類はあるので頑張ってくださいね。」

「わかってるって。」

ある程度片付いたらクリューを誘って休憩でもするか。

この日、ゼナは帰ってこなかった。

～四日目～

「ゼナが帰ってこない？」

「ええ、クリューお嬢様に街の中を探知してもらったのですが反応は無かったとのことです。」

「…嫌な予感がする、ちよつと町で聞き込みに行ってくる！」

「聞き込みですか、私も同行します。」

「クリュー院。」

「私は霊体化し、空を見回りながら警護しますので安心して聞き込みに集中してください。」

「よし、じゃあ行くぞ！」

街に出てから色々な魔物や人間に話しかけたがこれといった情報は得られなかった、ただアクセサリー店で見かけたとの情報が手にはあったので一先ず向かって見ることにした。

「魔王様、いかがなされましたか？」

「私の側近補佐のゼナを探しておる、見かけなかったか？」

「あー…昨日買いい物に来たあの子ですね、買いい物し終わってから黄色いターバンをした奴等を尾行するように追っていききましたけど…。」

「黄色いターバン…フー盗賊団か！あの大馬鹿者…！礼を言う！これはチップだ。」

「あつ、魔王様!？」

適当に金貨を渡し、全力で魔王城に戻る。

「コフィン！」

「いかがなされましたか？魔王様。」

「あの馬鹿フー盗賊団を追いかけて行きやがった！」

「…それは事実なのですか？」

「間違いないと思います、心の目を使用しても嘘をついたようでは無かったです。」  
「クリュー、ゼナの反応を探れるか？」

「…無理です、どうにも妨害されてて分からないです…すみません。」

「いや、こつちこそ無理言つてすまない…取り敢えず王政よりもあいつを探すのが先決だ、魔術隊を呼び出してくれ。」

「畏まりました、お嬢様も手伝つて頂けますか？」

「はい！」

「では我はスラムの奴等にも聞き込みしてくる、何かあつたらカメイアをこちらに寄越してくれ。」

「はい、分かりました。」

城の前に停められていた馬に跨がり、手綱を打ち付ける。

「ハーッ！」

どうか無事で居ろよ、ゼナ…！

## く五日目く

しくじってしまった、まさか後ろから新手が来ていようとは…。

「…ここは…鉢山？」

どうやら奴隸馬車に乗せられていて手枷と足枷をされているらしい。

「気がついた様だね。」

「誰!？」

「おっと、僕も奴隸さ、この手枷と足枷が見えないのかい？」

「…ここは？」

「位置と経過日数から見て…辺境の山の裏つて所かな？」

「…どうしよう、魔王様に認めて貰えなくなる…。」

「魔王?どこの魔王だい？」

「えつと…ブルフェイアル一族が治めている場所。」

「あー、最近魔王が変わって良い方向に向かっているあの国か。」

「…ダメかな、やつぱり。」

「おや、弱気とは随分な反応じゃないか。」

「だって…リザード一族の女は人間みたいな体だし、そこまで強くないし、鱗なんて…柔

「らかいし…。」

「…まだ目的地まで相当遠い、少し眠ると良い。」

「そうさせて貰うよ…。」

「…さあ、これからどうする気だい？…異世界の役者さん。」

〜六日目〜

1日馬車を走らせたどり着いたのは薄暗い洞窟に作られた監獄だった。

「…ここは。」

「入れ。」

「きやつ…！」

「直ぐにボスを読んでくる、そこで待つておけ。」

「…。」

どうしよう…このままじゃ好き勝手犯されて殺される…逃げないと…。

「逃げよう…。」

「…あんたは？」

「…長いことこの牢獄に住んでるおばさんさ。」

「…ここから逃げる方法とか分かる？」

「はっ、そんなものあったらとづくに使ってるよ。」

「…はあ、そうよね…。」

「…アンタ、名前は？」

「…ゼナ。」

「ゼナ…!？」

「？、私を知ってるの？」

「……いや、人違いさ、気にしないでおくれ。」

タバコを吹かし、こちらを見ようとしなない。

「アンタ、母親は居るのかい？」

「ううん、小さい頃に少し顔を見たつきり…元気かな…。」

「…女つてのはしぶといもんさ、どっかで生きてるだろうよ。」

「…かもね。」

ガシャガシャと鎧が揺れる音が響いて聞こえる。

「…誰か来る。」

「よお、てめえがツケてた魔王の手先か。」

「…アンタがフー盗賊団の親玉って訳ね。」

「ああ、もう一人居るがな。」

「…どう言うこと？」

「何だ？知らねえのか？」

「止めな！そいつはその子に話して良い事じゃないよ！」

「ちっ…てめえの部屋だったのかよ…まあ良い、そいつを取り押さえてろ。」

「なっ…何をするんだい！止めな！」

巨大な男二人が二人係で腕を拘束する。

「なあ嬢ちゃん…てめえが知らねえ事を教えてやるよ。」

「…何を？」

「何故リザードマン一族の女は人間タイプなのか、もう一人のボスは誰か…。」

「!!？」

「それはな…てめえの一族の男衆が、俺達の拐ってきた人間の女をここで好き勝手犯して産まれたガキを里に持ち帰ってるからだよ、そしてその首謀者は…リザードマン一族の長であるてめえの親父だよ。」

「え…。」

信じられなかった、だってお父さんは…。

「そりやあ楽しそうだったぜ？無責任に種ツケリや誰でもよかつたんだからなあ。」

「う…うあああああ！」



殴りかかる…が、丸三日なにも食べてないので力が入らない。

「おっと、何だそのへニャパンチは…オラッ！」

「がはっ…！」

お腹に強力なパンチを突き刺さるように捻り込んできた、胃液が逆流し、その場に立てない位のダメージを受けてしまった。

「なんだよ、1発で終わりか…やっぱりハーフじゃ出来損ないなんだな…適当に犯して捨てるか。」

「く、くるな…。」

「へっ、お楽しみさせて…。」

「離せっ！」

さっきの人が押さえていた男二人を振りほどき、消えかけていたタバコを掴みとってフリー盗賊団のボスの額に押し付けた。

「…死ぬ。」

腰に下げていた剣を振り抜き、胴体に突き刺した。

「お母さん！」

えっ、今お母さんって…。

「…無事かい？」

「あ……ああ……思い出した……」

遠い記憶にあった、何処か懐かしい記憶……それが今鮮明に写し出される。

「全くバカ娘が……」

微笑しながら、ゆつくりと目を閉じた。

「はーっはっは！コイツは泣けるぜ！まさか守ったのがかつての母親だとはなあ！」

「殺してやる……絶対に……アンタだけは……！」

「おっと、どうする気だい？まさかまた殴りかかってくるのか？」

「……我が一族に伝わりし豪槍よ……！」

魔力を削り、召喚魔法を唱える、もつと……もつと！力を！

そして現れたのは古ぼけた槍、からつきしの魔力で呼び出せただけまだまともだ。

「はあ……はあ……これで戦える！」

「ほお、じゃあ遊んでやるよ。」

「やあああ！」

渾身の一突きをお見舞いするがひらりと回避する。

「遅い！」

「ぐうっ……！」

やっぱり届かないの…？私じや…駄目なの…？

「取り押さえろ。」

「離してっ！」

必死に振りほどこうとするがダメ、もう力が出せない…。

「さあ…楽しませてくれよ…？」

「魔王様っ！」

ああ、もつと魔王様の為に…役にたちたかったな…。

「ヴァイオレンス…サンダーアアア！」

「っ!？」

赤紫の雷が迸り、私を取り押さえていた男二人の上半身を焼き消した。

「何だてめえ！」

「ゼナ、無事か。」

「は、はい…ううっ…。」

「よく、持ちこたえたな…少し、眠っておけ。」

睡眠魔法を唱え、強制的に眠らせる。

「…貴様は私の逆鱗に触れた…覚悟しろ。」

「ハッ！ここは俺様の根城だぜ？直ぐに増援が…。」

「ああ、それなら私が大体心臓をえぐり抜いたので死んだと思いますよ？」

「苦勞…コフィン、奴に『最上級の絶望』を味会わせてやれ。」

「畏まりました…では魔王様はゼナさんを連れて外に。」

「分かった。」

転送魔法を唱え、洞窟入り口まで飛ぶ。

「はっ、最上級の絶望だ？やれるもんならやってみろよ。」

「そうですね…確かあなたは人間界に家族が居ましたよね？」

「!?」

驚いたように目を見開き、絶句する。

「家族構成は父、母、後は奥さんと娘が二人…でしたっけ？」

「テメエ！家族に手え…。」

「アイアンフック、ヴォルカ。」

手枷を飛ばした一瞬の隙に炎魔法を放ち、焼けつく手枷が装置された。

「ア”ア”ア”ア”ア”ア”！」

「熱いですか？苦しいですか？ですがご安心してください…これより、貴方が今まで大切にしてきた物を全て目の前で失わさせて頂きますので。」

「ヤメ…ロ…！」

「貴方だって今までやって来たでしよう？まさか…自分だけダメとか言いませんよね？」

「ふぎ…けんじゃ…ねえぞ…！」

「ふふ、ではこれよりシヨーを開始致しましょう！」

指をパチンと鳴らし、コフィンがライトアップされていく。

「まずはプロローグとして父親の火炙り、母親の水没劇、メインとしてオークの集団で貴方の奥さんを犯し、エピローグとして娘二人をスライムと！触手で！犯した後の溶解シヨーをお送りいたします！」

「どんどん青ざめて行くフーの顔、最早コフィンを止めるものは誰も居ない。

「た、頼む…俺ならどうなっても良い、だから家族だけは…。」

「どうなっても…？とおっしやりましたね？」

「あ、ああ…だから…。」

「では絶望を与えさせて頂きましょう。」

「!？」

「さあ…死にたくなっても死ねない絶望を…ごゆるりとお楽しみください♪」

「やめろおおおおお！」

悲痛な叫びは誰にも届くこともなく、無惨に響くだけだった…。

く7日目く

「…うう。」

「目が覚めたか？」

「ここは…？」

「魔王城だ、あれから丸一日寝るとは思わなかったぞ。」

「そう…ですか…あの…私…。」

「ああ、側近の件か？ 勿論不採用…。」

「っ…！」

「と言いたいところだがお前が自ら囿になったと説明してしまったからな、採用せざるを得なかった。」

「それって…！」

「採用だ、これからよろしく頼むぞ？ ゼナ。」

「はっ、はい！」

漸く一区切りついた所で脱力してしまう。

「……はあー！疲れた！ほとんど演劇モード切つてなかったから疲れた！寝る！」

「魔王様、その前に説明を。」

「あ、コフィンさん。」

「全く……今日はお休みでも構いませんがせめてアレ位言わないと……。」

「すまん……ゼナ、よく聞いてくれ、俺は本物の魔王じゃない、本物の魔王は……。」

「お粥持つてきました……あれ？」

「……認めたくないだろうがこれだ。」

「あっはい。」

………軽くね!?

「いやまあ……薄々気づいてたんですよ？だからある程度予測できたと言うか……でも、私は貴方の右腕ですから！それくらい受け入れないと！」

「……強いな、お前。」

「えへへ……あ、そうだ、あの部屋に居たおかあ……女性の死体って……。」

「死体とは失礼だねえ、まあ死んでるけどさ。」

「えー!？」

何故こっちの方に驚くんだコイツ。

「お、お母さん…何で…。」

「アンデッド化魔術を受けたんだよ、お陰でもうちよい生きれるようになったと言う訳ね。」

「…バカ、お母さんの…バカアー！」

「うおつと…いきなり飛び付くんじゃ無いよ。」

「うるさい！臭い！お風呂入ってよ…！」

「…ああ、言われなくてもそうするさ。」

拝啓、お母さん

俺は久しぶりに親子愛を目の前で見ました、もし…戻れたら、また色々と口喧嘩しながら喋りたいと思います。



次回 「毒沼の魔王、ルレンティア」

## リザードウーマンの一週間（裏）

これは五日目と六日目の魔王に起きていた、裏の出来事である。

（五日目（裏））

少しでも情報を集めるためスラムのボスであるハートに話を聞くためにスラムにやって来たのだが…そこは変わり果てていた。

「何だ…これは…。」

それは原型すら留めてなく、ただただ燃え広がっていた。

「ヒカナ!? どうしてここに!?!」

「ハート…これは…?」

「レイゲア教団の仕業だ! 何でも崇めるは前魔王だとかふざけたこと抜かしてる頭の可笑しい連中だ。」

「そうか、スラムの皆は?」

「全員避難させている、ただ…さつきよりも数が増えてるって事が一番の問題だな。」

指差す先には…白と黒のフードを被っている無機質な軍隊だった。

「チツ…ヒカナ、手伝ってくれるか?」

「殺さぬ程度なら加勢してやろう。」

「…分かった、止めは俺が刺すから出来るだけ援護してくれ。」

「うむ、では…行くぞ！」

魔石を握り締め、指先に集中する…。

「オラアアアア！」

勇猛果敢にレイゲア教団の教徒に斬りかかり、道を開けるがやはり数が多いのであつという間に取り囲まれる。

「アースデイバイドー！」

地面から飛び出てきた岩石が腹を殴り、壁になり、武器を弾く。

「ナイスっ！」

その隙を突いて腹を岩に殴られし者の首を切り落し、壁に阻まれた者は腹を貫かれ、武器を弾かれた者は袈裟斬りにされた。

「くっ…撤退だ！」

「2度と来んなクソツタレめ！」

教徒の撤退を確認し、辺りにを見渡すと…有るのは死体の山と燃え盛る廃墟…正直これ以上この場に居たくない。

「…ヒカナ、こういった死体を見るのは初めてか？」

「ああ…場所を変えないか？正直…ここに居たくない。」

「分かった、じゃあ避難場所に案内する。」

「うむ…。」

それから黙って後ろを付いていくと…そこは街の廃劇場だった。

「ここくらいしか空いてなかったもんでな、勝手に使わせて貰ってる。」

「それは構わぬ…怪我人は？」

「重症な奴が89人、死んじまった奴が44人、軽傷は数えてねえ。」

「そうか…。」

「…なあヒカナ、アンタが思ってるよりもこの国は相当ひどい所まで追い込まれている

…魔王の代理、辞めちまった方が楽だぞ。」

「…それはでき…ぐっ！」

全力で殴られた、だけど…ここで膝を着く訳にはいかない。

「ここは正しきだけで生きていける世界じゃねえんだぞ！分かってんのか！」

「分かってる！だからこそ…だからこそ俺が変えなきゃいけないんだ！」

「…どう言うことだ。」

「アークを寄越せ、俺の体に…無理矢理力を注ぎ込んで一定時間本物の魔王と同じ力を得る。」

「ばっ…バカかお前！確かにその魔石がありや怪我人を治す事だつて出来るけどよ…。」  
「うるさい！俺だつてこんなことするのは怖い…でも！この国を変えてやるつて決めてんだ！」

「…ああそうかい！勝手にしろ！」

乱暴にアークを投げ渡し、向こうを見る。

「モタモタすんな！重症の奴が死ぬぞ！」

「ああ…。」

アークの蓋を開け、中を覗き込む…。

視界がボヤけ、瞬きしたと同時に辺り一面が白い世界になった。

『やあ、君が新しい魔王かい？』

「だれだ!？」

背後から声をかけられ、振り向くと眩い光を纏った少年が玉座に座っていた。

『僕？僕は…神様の一人かな？とにかく君に力を授けることが出来るよ、どんな力が欲しい？』

「…一定時間で良い、本物の魔王同等の力を来れ。」

『それは良いけどさ…せっかく久しぶりに開いてくれたんだし、何か知りたいことが有るんじゃないの？』

「…よく分かったな、俺が聞きたいことは…。」

『あのリザードの娘の安否とフー盗賊団のアジトだよな？ 勿論教えてあげるよ。』

…心を読まれているようで落ち着かない。

『そりやあ心を読んでるからね、僕は神様だよ？ 容易い事さ。』

「…そうか、じゃあ勿体振らずに教えてくれ、時間が無いんだ。」

『うん、その代わり…君は人間だから何かしらの副作用も与えなければいけない。』

「何？」

そうなるとは思っていたが…あまり支障のきたさないものにして欲しい。

『そうだなあ…一定時間殺すことに対する抵抗を消す奴にしよう、後から後悔がだーつ

て来る奴…今ならキャンセル間に合うよ。』

「結構だ、早くしてくれ。」

『…分かったよ、全く…人間ってのは本当に強欲だね。』

玉座から飛び降り、こっちに歩いてくると…胸にナイフを突き刺した。

「なっ…。」

『さあ行つてらっしやい！ これから地獄の始まりだよ！』

「カナ…ヒカナ！」

「はっ…ここは…。」

「お前立ったまま気絶してたんだぞ、大丈夫か？」

「…ああ、それよりも早く案内してくれ。」

「分かった、こつちだ。」

後ろを付いていくとシートを倒し、氷や水で冷やしてる者も居れば薬草を摩つたものを張り付けてる者も居るが…薬が圧倒的に足りていなかった。

「ハートよ、重症の者から我の前に出せ、一瞬で治す。」

「あいよ！おいテメエら！手が空いてる奴から手え貸せ！魔王様が治してくれるってよ  
！」

「何?!魔王様が!？」

「よし!これで助かる!軽傷の奴等も手え貸せ!働くぞ!」

続々と運び込まれてくると同時に手から治癒魔法を放ち、焼けた肉や爛れた皮をみるみる治していく。

「後は栄養補給だ、後で城の食料庫から送らせる。」

「兄貴!スラムの炎が更に燃え広がって街の方に!」

「こんな時に…。」

「我に任せよ、後は頼んだぞ。」

「…すまねえ、頼む。」

それから転位魔法でスラムに移動し、手から魔力を放出する。

「…クアドラ・ヒュドール！」

四方に飛び出した球体が弾け、辺り一面全てに水を散布した。

「…これで大丈夫そうだな、一度城に戻ろ…う…。」

多分魔力の使いすぎだろう、意識が…。

「もう、無茶しすぎです。」

倒れかけたところで優しく抱き止められた…この匂いは…。

「コ…ファイ…ン…?」

「ええ、貴方のコフィンですよ…この短時間に随分無茶をなされていたようですね。」

「面目ない…だか急がなければ…ゼナが…。」

「大丈夫です…少しこのまま、お休みください。」

「助か…る…。」

瞼を閉じ、身を委ねると優しく頭を撫でてくれている、懐かしいなあ…まるで…あの



…ひ…と…。

「眠りましたか…カメイア、居るのでしよう？」

「…これ以上、その人に過酷な定めを与えないでください、もうその人は…。」

「黙りなさい…薬と食料をあの劇場に配達を、それと兵の用意を…フー盗賊団の討伐を発令します。」

「…分かったつすよ、でも…その人の優しさをこれ以上利用しないでください。」

カメイアは諦めたように溜め息をつくと言モードにチェンジし、空高く飛び去った。

「…私だって、辛いんですよ。」

涙を流し、魔王が目覚めるまで優しく抱き止めていた。

く六日目（裏）く

あれ…？あの後どうしたんだっけ…確か怪我の治療のあとに火災の沈下をして…それから…。

「ゼナっ！」

「ん……？魔王様、お目覚めですか？」

「コフィン、今何時だ？」

「丁度午前5時ですね。」

「そうか……急ぎ馬の準備を……うぐっ！」

身体中の筋肉がすごく痛い、頭もガンガンする。

「無茶はいけませんよ。」

「でも……！」

「兵の用意は終わってます、場所も落ちてきた封筒に記されてました。」

「落ちてきた封筒……？」

ああ、あの自称神様の仕業か。

「さ、お嬢様が城で心配してると思いますので一旦帰りましょう。」

「分かった……そうだ、スラムの皆に物資を……。」

「スラムの方なら心配要りません、既に手配しております。」

「はっ、本当に気が利くメイドだな。」

「勿論ですとも、あら……？どうやら迎えが来たようです。」

空から一匹の白竜……もとい、カメイアがこっちに向かってくる。

「日加那さーん!」

「クリュー!?!」

なんとクリューがカメイアの背中に乗りながらこつちに手を振っている。

「わわ…落ちる〜!」

「あのバカ…!」

脚力と筋力を瞬時に強化して落下地点に走り、ギリギリのところまでクリューを受け止めた。

「つと、無事か?」

「し、死ぬかと思いましたが…。」

「全く…無茶をするなつての。」

「え、えと…日加那さん、一回下ろしてもらって良いですか?」

「ああ、悪いな。」

クリューを下ろすといきなり抱きつかれた。

「心配しましたよ…だって『魔石の全力を全部使っている』なんて連絡きたら眠れなかつたんですから…。」

コフィンさんの方をチラツと横目で見てみると少し俯いていた。

「悪い、ちよつとバタバタしてたもんでな。」

恐らくアークを使ったことを話すと余計心配してしまうと言うコフィンさんなりの配慮だろう。

「あ、減少しているようなので私の魔力を少し受け渡しますね。」

「助かる。」

魔石に光が灯り、体の痛みが少しやわらいだ。

「お話は済んだっすか？」

「ああ、乗せてくれるか？」

「勿論っす！ ささ、どうぞ。」

乗りやすいように項垂れる、だけど流石に三人は定員オーバーかもしれない。

「魔王様、私とお嬢様は後から参りますので先に御一人で行ってくださいませ。」

「良いのか？」

「ええ、むしろ早く行ってあげてください。」

「…カメイア、飛んでくれ。」

「はあーいよおー！」

勢い良く飛び立ち、馬車とは比べ物にならないくらい早く城前までたどり着いた。

「…共に駆け抜ける強者共よ！ 我こそはと賊を討たんが為に！ 我の前に忠誠の剣を掲げ

よー！」

兵士が皆ザツと足並み合わせ、剣を空に掲げる。

「では行くぞー！」

「「ウォー！」」

声高く雄叫びを上げ、馬で駆ける兵士と共に凄まじいスピードで目的地である国境近くの山に飛ぶ。

「ぐう……！」

「大丈夫つすか!？」

「なあに、軽く風が強いただけよ、そのまま飛ばしてくれ。」

「は、はいっ！」

目的地である入り口近くでは打ち落とそうとする賊がいるが、氷の槍を3本精製し、頭の上から突き刺した。

「…本当に、躊躇いが無くなってしまったな。」

後悔なんて微塵も出てこない、何一つとして疑問も浮かばない…。

「アレつすね！」

「そうか、我は飛び降りるが故、着陸の必要はない。」

「了解つす、じゃあ御武運を！」

「うむ。」

するりと飛び降りるが浮遊魔法でダメージ無く着地する。

「な、何だテメエ！」

「…賊には名乗る事は無いが…まあ冥土の土産だ、教えてやろう…我はクリューダ・ブルフェイアル、魔王だ！」

手から放つ黒い雷で門番と思われる奴を全員焼き殺し、扉を蹴破る。

「ほお…随分広いのだな、まあ…歯向かった賊は皆殺す、ただそれだけだ。」

小走りしながら賊を殺し、鉄格子の鍵をついでに壊していく。

「邪魔だあ！」

「た、助けてく…ぐへっ。」

「ば、化けもんが…これでもくらえっ！」

大筒の大砲から発射された弾を受け止め、投げ返す。

「返すぞ。」

「うわああああ！」

飛び散る血と肉の焦げる匂いを何一つ介さず、ただ前に進む。

「む…！あそこか…。」

「魔王様っ！」

「伏せろ！ヴァイオレンスサンダーアアア！」

赤紫の雷が迸り、ゼナを取り押さえていた男二人の上半身を焼き消した。

「何だてめえ！」

男には何一つとして目もくれずゼナを介抱する、こんなにもぼろぼろになって怒りが吹きあがる。

「ゼナ、無事か。」

「は、はい……ううっ……」

「よく、持ちこたえたな……少し、眠っておけ。」

睡眠魔法を唱え、強制的に眠らせる。

「……さて、これで心置きなく貴様を殺せる……覚悟しろ。」

「ハッ！ここは俺様の根城だぜ？直ぐに増援が……」

「ああ、それなら私が全て心臓をえぐり抜いたので死んだと思いますよ？」

「ご苦労、では……コフィン、奴に『最上級の絶望』を味会わせてやれ。」

「畏まりました……では魔王様はゼナさんを連れて外に。」

「分かった。」

転送魔法を唱え洞窟入り口まで飛ぶとゼナの容態を確認する。

「……やはり怪我を負っているな、回復させておくか。」

手から治癒の光を浴びせ、打撲や擦り傷を治していく。

「…ふう、本当に無茶をしてくれる。」

俺も人の事を言えた口じゃないけどな。

「ちよいとそこのお方。」

「新手か!？」

手に魔力を溜め込み、すぐさまVサンダーを撃つ準備をする。

「違う違う、だからその物騒なモンを下げておくれよ。」

「…では問おう、貴様は何者だ。」

「そうだねえ、その子の産みの親…とでも名乗っておこうか。」

「母親だったのか…それはすまないことをした。」

「いや、育ての親は別さ…まあ、その子は微かに覚えていたようだけどね。」

「そうか…それで、霊体になってまで我に何用だ。」

「…アンタ魔王だろ？ だったら一つ頼みたいことがあるのさ。」

「何だ？ 非礼の変わりに聞いておこう。」

「あそこの地下牢に死体が有っただろう？ アレを少しでも良いから生き返らせておくれよ。」

「何故だ？」



「…今さら言えた口じゃないけど、その子にお別れ言いたくてね、頼めるかい？」  
「…あい分かった、では早速連れてこよう。」

ゼナを取り敢えず床に寝かし、転送魔法でまた牢に戻る。

「誰も居らんか、よつと…。」

血が滴る死体に触れ、治癒と同等に魔力を込める。

「うぐつ…。」

コフィンさんから教えて貰ったんだが死霊系魔術は周りに居る死霊が術の対象を乗っ取ろうとするため、全ての負荷を負わなければいけないとの事。

それにしても酷いものだな、さっきまで殺していた奴等までもがこの体を求めて襲ってくるとは…。

『死ね！死ね！死ね！』

死霊の声も響くオプシオン付きかよ…だけど…俺は…！

「うるせえ…全て纏めて消してくれる！」

もう片手で浄化魔法を払い、張り付く死霊を消していく。

「はあ…はあ…。」

またしても魔力を殆ど枯渇させてしまったが…どうやら成功したようだ。

「…感謝するよ、ってアンタ…人間だったのかい？」



!？」

「お…俺は…。」

「大丈夫です…私も貴方の罪を共に背負います…だから、どうか…また前を向いてください。」

「…ありが…とう…また…迷惑を…かけ…る…。」

もう意識すら保てなくなり、その場で気絶してしまった。

「…ええ、共に背負いますとも…冥界であろうとなんであろうと…御供しますよ。」

コフィンを抱き寄せて意識のない日加那にキスをした。

「…帰りますか、貴女も付いてくるのでしょうか？」

「ああ…ついでに入り口付近で寝てる娘も頼むよ。」

「畏まりました。」

転送魔法で先に入り口付近まで飛び、日加那とゼナを二人担ぎ上げ城まで転送魔法で戻った。

それから昼過ぎで寝過ぎ、最近慣れ始めた毛布の感触で目を覚ました。

「(イイ)は…。」

「日加那さん、おはようございます。」

「クリュー…。」

「あ！まだ少し寝てて下さいね、さつきコフィンさんに『動かさないように見張って下さい』なんて言われちゃいましたし…。」

「…悪い、少し一人にさせてくれないか？ちよつと…元に戻るまでの時間が欲しい。」

「…ダメです。」

「え？」

「今日加那さんを一人にさせてしまうと…絶対壊れてしまいます…だから…その…私に、甘えてください。」

「驚きだった、まさかこの間までビービー言ってたクリューがここまで成長してるとは…。」

「…生意気な事を言うなよ、クリューのくせに。」

「ダメだ、ここで、挫けて、しまつては。」

「うう…それとも私じゃダメですか？」

「…全く、そんな言葉どこで覚えてきたんだか…こつちに来い。」

「は、はいっ！」

目を輝かしながら近寄つてくると優しく抱き締めた。

「日加那さん…。」

「悪い…もうちよつと…このまま。」

「…いくらでも甘えちやつて大丈夫です、私は…貴方の近くに居ますから。」

それから20分間クリューに見えないように泣き続け、ゼナが起きるまで待っていた…だが何故クリューとコフィンは俺に対してこんな思い入れがあるのだろうか…俺はその疑問を思い続けていた。

## 毒沼の魔王      ルレンティア

ある日の午後、クリューの特訓中に一通の手紙が届いた。

「…クリュー、休憩時間だ、今のうちに水分補給と息を整えておけ。」

「は…はい…。」

息を切らしながらへたり込むと回復剤入りドリンクを飲み始めた。

「えー…と、宛名は…毒沼の魔王？」

封筒を開き中身を確認しようとしたらとんでもない毒気が鼻を突き抜けた。

「うぐっ…。」

目眩と吐き気、意識が遠退くと同時に手足が痺れてきた。

「日加那さん!?!」

「ゲホッ…死、死ぬ…。」

「げ、解毒魔法を…!」

「その必要は無いわ。」

「えと…貴女は？」

金髪ツインテ、廻りに紫の煙が立ち込めるその姿は…。

「その書状の送り主……とでも言えば良いかしら？」

「お前が……ぐう、毒沼の魔王……！」

「日加那さん!?!しつかりしてください!」

クリューが揺するが意識が遠退く一方で、もう…。

「えいつ。」

「っ!?!」

天井裏から降りてきたコフィンさんがブスリと注射器を首筋に打ち付けると体の異常がどンドン和らぎ、今なら魔法を放てる位まで回復した。

「ヴォルカ!」

「バリアっ!」

腕で軽く防がれたが結構なダメージが入ったと伺えるのでクリュー経由で魔力を魔石に込める

「ヴァイオレンス!サンダーアアア!」

「ミストシールドっ!」

浮遊していた霧が盾となり守るがランクが1つ上のヴァイオレンスサンダーが難なく弾き飛ばす。

「止めの……!」

「とーっぷ！待ってください！」

小柄なメイドが毒沼の魔王の前に仁王立ちする、コイツは…。

「あら、テンさんじゃないですか。」

「先輩も止めてくださいよ！今本気でこの人殺そうとしていたのですよ！」

「いきなり毒殺しようとした奴には良いんじゃないんですか？」

「そのー…それは…。」

どうやら二人は知り合いのようだ。

「テン、下がってなさい…それは私の口から説明するわ。」

「姫様…分かりました。」

よろめきながら立ち上がる毒沼の魔王は指を指し、大きな声で言い放った。

「ブルフェイアル家の！貴方が奪って行った『毒制の秘宝』を返して貰うわよ！」

「…何だそれ。」

全くもって身に覚えが無い。

「…日加那さんちよつと良いですか？」

「何だ？」

耳打ちしてくるクリューは、とんでもないことを言った。

「勇者に渡したアレが前魔王の盗品ー!？」



「ちよ…声が大きいです、聞こえて…。」

ちらつと横目で見てみると…まるで全ての希望を断たれたような顔をしていた。

「…クリュー、どうするよ。」

「えつと…勇者さんに返して貰うか同一の力を持つ別の秘宝を取りに行くしか…。」

「取りに行けるのか?」

「はい、それは城の地下迷宮の最下層に保管されています。」

「…長そうだなあ、でも仕方ないか。」

魔石を握り締めて衣装を装着し、演劇モードに入る。

「コフィン、明日から迷宮に行つて来る故2日ほど城を頼む。」

「畏まりました。」

「私も同行します、少しは道案内出来る筈なので。」

「…待ちなさい、私も行くわ。」

「…こう来るとは思つたが…まあ致し方無いか。」

「構わん、勝手にしろ。」

「そう…テン、私の分の荷物を準備しなさい。」

「ええ!?!正気ですか!?!」

「当たり前よ、私は…うっ。」

立ち上がった瞬間によるめき、俺にもたれ掛かって………!?

「……うあ。」

溢れでる毒が瞬時に体に回り、意識がどんどん遠退く。

「キヤー！日加那さーん！」

やべー、サンズリバーの奥にグランマが…。

これは…夢？にしては随分と懐かしい感じがする。

「王子様、お迎えに上がりましたわ。」

あれ？何か思い出しそうなんだが…何処か…霧が…。

「王子様？王子様つたら…魔王様！」

「はうあー！」

頭を叩き起こしたのは黒髪のお姫様なんかじゃ無く黒髪メイドのコフィンだった。

「…お姫様は？」

「…ボケて無いでさっさと起きてください。」

「いたもん！黒髪超絶美少女いたもん！」

「はあ……どんな方だったんですか？その黒髪超絶美少女ってのは。」

「えーとな……何処か懐かしい感じのする子で、若干コフィンさんに似てて、俺の事を王子様って…。」

「!!？」

「あれ？コフィンさん？」

咄嗟にうつむき、何かぶつぶつと呟いている。

「おーい、コフィンさ…。」

「…魔王様、お許しを。」

「え？」

胸ぐらを捕まれ、口移しで何かを飲まされた。

「!？」

「ごめんなさい…ごめんなさい…。」

あたまが、ぐらつく、なんか、もう、かんがえられない。

「日加那さん起きてください、もう朝ですよ。」

「んえ…？クリュー？」

あれ？昨日なにしたんだっけ…。

「毒の影響で眠ってたんですよ、覚えてませんか？」

「あー…何か迷宮に行くとかかって言ったような…。」

「もう…あんまり無茶しないでくださいね。」

クリューから抱き締められる、胸が大きいせいでちよつと苦しい。

「…悪い、心配かけちゃまって。」

「いえ、私は魔王としても不十分なのでこれくらいは…。」

「朝からいちやつくとは随分余裕ね。」

「毒沼の魔王…。」

クリューを後ろに行かせいつでも魔法を放てる準備をする。

「その呼び方は嫌いよ。」

「じゃあ何て呼べば良いんだよ。」

「…ベフィス・ルレンティア、上の名で呼びなさいブルフェイアル家の。」

「ああ、短い間だがよろしく頼む。」

「…所でアンタ、人間なんですってね。」

「…悪いか?」

「別に、影武者を使うのは珍しい事では無いから。」

質問の意図がさっぱり分からないがまあ嫌悪しているわけでは無いようだ。

「さっさと行くわよ、時間が惜しいもの。」

「ああ、分かった。」

ベフィスも国の事を思つて居るのだろう、急いで支度された荷物を背負い、魔石をポケットにしまう。

「…準備完了、で、どうやっていくんだ?」

「えっと、それはですね…。」

小柄な包丁を取りだし、両手で構える。

「え、クリュー？」

「貴方を殺して私も死ぬ…。」

何か物騒な事言ってる！

「ちよっ…まつ…。」

腹部に包丁が突き刺さり、悲しみの向こうへとたどり着けそうになる。

俺を呼ぶ声が聞こえる、誰だ？蜘蛛男か？

「日加那さん、しっかりしてください。」

「…クリューてめえ、なに何事も無かったような顔振りしてんだ。」

「え、えつと…ごめんなさい、こうするしかなくて…。」

「我説明求。」

「か、かくかくしかじかです。」

「成る程分らん。」

「はあ…じゃあ代わりに私が説明しましょうか？」

「出来るのか？」

ベフィスがため息を着き、俺を突き刺さしたであろう包丁（仮）を取りだし、指で弾くとダイレクトに痛みが走った。

「いでっ!？」

「これは包丁みたいに見えるけど立派な秘宝よ、その名は『魂離の小刀』…その名の通り魂と体を一時的に引き剥がす曰く付きの秘宝よ。」

「引き剥がす?理由が見つからん。」

「…この迷宮、実は上級魔族しか入れない場所なんです。」

「……………は?」

「ごめんなさい!説明忘れてました!」

成る程、だから魂引き剥がしてーってか。

「おいクリューよ、ちよつとこっちに来いや。」

「は、はい…。」

近寄ってきた瞬間に手足に肉体強化を掛けて瞬間的に背後に回り、腹辺りで腕を回してがつつりつかみそのまま背後に振り返った、人はそれを「バックドロップボム」と呼ぶ。

「紛らわしいわああああ!」

「にやあああああ”っ！」

石畳が剥がれるほどのバックドロップボムを解き、ベフェイスに向き直る。

「…一応聞くがその小刀を俺に渡して貰うことは出来るか？」

「無理に決まっているでしょ、言っておくけどもし何か有ったら…へし折るから」

末恐ろしい事を言いつつ懐に小刀を仕舞いこむ、やはりそう簡単には渡してくれないよなあ…。

「クリュー、お前いつまで寝て…縞か。」

クリューのスカートを軽く捲り中を確認すると水色と白の縞、この魔王縞。 Panda。

「何を見てんのよっ！」

ベフェイスがスパアンと良い音を響かせ頭を叩いた。

「いや、男たるものスカートの中が気になるのは当然なんだよ。」

「そ、そうなの？」

「俺の目を見ろ、嘘をついてるように見えるか？」

「…目を泳がせてるから嘘ね。」

「良く分かったな、才能有るぞ。」

「嬉しく無いわよ…ほらあんたもさっさと起きなさい！パンツ見られてるわよ！」

「!?」



「何を仰る、言い掛かりはよしたまえ。」

「…何色でした？」

「水色と白の縞だったな。」

「見てるじゃないですかあああ！」

更には距離を取られる始末だ。

「はあ…あんだ達と一緒に居ると何日掛かるか分かったもんじゃないわ。」

ベフェイスが一人でつかつかと歩きだすとカチリ、と妙な音がした。

「……………」

「…よしクリュー、さっきのバックドロップボムで出た大きめの石を取ってくれ。」

「は、はい。」

クリューから大きめの石を受けとるとベフェイスに向き直る。

「さあ毒沼の魔王さんや、交渉と行こうじゃないか。」

「あんだクソ汚いわね！」

「罠を踏んだのはお前だろ？つか手紙に毒仕込んでたあんだも十分汚いぞ。」

「ぐっ…それは…。」

「さ、これで同等だ。」

「誰があんだなんかと同等ですって!？」

一歩こつちに踏み出してきたらガコンと鈍い音が響き、俺とベフェイスの足元に穴が空いた。

「ぎやあああああ！」

「日加奈さーん!?!」

奈落の底へと落ちて、何が待ち構えて居るのか…とりあえず切に願うのは、只生きたいと言った感情だった。